

第五部 チェルノブイリ事故に対する 国際的専門家の評価

第一章 世界保健機関の専門家による結論。 旧ソ連邦の共和国の反応

ヨーロッパの住民に対する、チェルノブイリ事故での放射線による影響についての最初の科学的評価は、世界保健機関によって始められた。五月六日、つまり爆発の十日後に、世界保健機関の要望により、国際放射線防護委員会議長ダン・ベニンソンを代表とする専門家達が活動を開始した。放射線の被災状況を評価することに加えて、ベニンソンのグループは、ヨーロッパの住民に対する被曝の影響を予測し、必要な予防的手段を提唱することになっていた。この時の専門家の基本的な結論は、必要以上の除染手段や避難活動などは必要ないというものであったが、雨水（他の水供給が資源として利用できる所での）や食料などの中における放射能の、より詳しい

モニタリングをすべきだと勧告した。

チェルノブイリ発電所の四号炉での爆発の原因と、放射線の影響を分析する会議は、ウィーンでIAEAの主導のもと、一九八六年八月の終わりに開催された。ソ連での、その会議に対する準備は、一九八六年七月、すなわち事故の二カ月後に始まった。政府首脳は、要約した報告書のついた資料を準備するよう命じた。最初に、政府委員会は、提示された情報がどこにも漏れないようにチェックしなければならなかった。その後、資料はクルチャトフ核研究所へ送られることになっていた。我々は、我々が直面する予想しにくい問題を、医学的に提示するように求められた。しかし、事故後の莫大な量のデータは、被害状況について調査し、全ての臨床的観察データを所有するバラノフの手にあった。パブロフスキーと同僚は、現状分析が非常に難しい状況にあるのに気づいた。彼らは、甲状腺の放射性ヨウ素被曝による影響を確認しなければならず、そのうえ何百万もの人々が住む広大な土地の、セシウム134と137の汚染に関連した、将来の長い期間にわたって累積する被曝線量を推定しなければなら

なかった。報告書作成の準備は最初から大きな問題に突き当たった。というのは、事故の二ヶ月後、放射線の状態の評価のために責任がある人々（特に、州の気象学委員会）はまだ、大気中の地表層の濃度は言うに及ばず、被害地での放射性ヨウ素の降下物の測定も行っていなかったのである（なお、その後数年間にわたり、これらの数字は利用できなかった）。したがってパブロフスキーは、主にこれらの評価を間接的なデータに頼らなければならず、仕方なくガンマ放射線の強度と他の全部のパラメータを使うこととなった。この結果、二つの表が編集された。それは、異なる年齢グループにおける、ソ連とヨーロッパ各地区の汚染された住民における甲状腺被曝の分布を示していた。全部で一、四八〇万人の人々に関するデータが得られた。その数字は、災害が極めて大規模であったことと、その結果として同じく大規模な医学的観察プログラムが必要であることを証明した。

最終的に報告書が編集され、政府委員会に提出された。この混乱の状況の中、まず全ての要約したデータが分類されていたのは注目に価する（グラスノスチは始まった

ばかりだった）。そしてそれは、検閲を通り抜けて、委員会によってその後公開された。

我々は、IAEA主催によるウィーン会議に向かう前に、報告書のタイプされたコピーを受けとった。しかし、検閲官による添削をうけたために、上記の表と論評はなくなっていた（これらは一九八九年に公開された）。いつものようにKGBを伴った大ソビエト代表派遣団の出発の直前、我々は報告書の内容以外のデータを会議で引用してはならないということを知らされた。翌朝ウィーンに到着した後、我々は原子力と放射線防護についての世界の指導的科学家や専門家が一堂に会し、多数の人々が集まっている国際センターへ向かった。会場の雰囲気は、重要な出来事が起こる予感で張り詰めていた。ロシア人は、チェルノブイリの爆発について何を言うのか？

ハンス・マーチン・ブリックス（IAEA会長）による短いスピーチの後、科学者のヴァレリー・レガソフを代表とするソビエト代表派遣団が紹介され、報道関係者達はホールを退去するように求められた。それからレガソ

フが立ち上がった。緊張の色を隠せないヴァレリーは演壇を上がり、五時間にわたって、たった一つのパンを食べただけで、報告書の内容を説明した。明らかに、それは注目に値するスピーチであった。聴衆は、文字通りにレガソフが提示した事実と、彼の演説の危険なトーンにショックを受けていた。誰も、四号炉の爆発に関するそのような大規模で詳細な情報公開を予想していなかった。翌日、本会議で、気象学専門部門の州委員会の代表者は、放射線の状況に関するデータを提示した。私自身は事故の予測と、採られた防護手段について話し、グスコバの報告は、急性の放射線障害で苦しんでいる患者の治療の結果を扱っていた。いくつかの作業グループが、ソビエト側によって提示されたデータと所見について検討する為につくられたが、いずれも異なる分野の専門家によって形成された。会議における専門家の声明の全ての内容は、後にIAEAから出版された。我々はこので、国際科学アカデミー共同体が、チェルノブイリで生じた全ての問題の客観的研究に対して、例外的でとても理解しがたい関心を示したと付け加えなければならない。一方では、

原子力の将来に関するチェルノブイリの影響が与える大問題があり、その一方で、できる限り客観的に事故の原因をはっきりさせ、将来において同様の事故を起こさないような勧告を採択する必要があった。概して、専門家は、事故の原因についての我々自身の結論を確認し賛成しているようでありながら、一方でより詳しくその問題を分析する権利を主張していた。特に住民防護手段に関して、専門家は災害の犠牲者を扱っていた我々ソ連側の勧告が国際的勧告と一致している点に気づいていた。

会議の間毎日、三〇〇—四〇〇人以上の報道関係者のための記者会見が行われ、アバギャン教授と私が、彼らの多くの問題に答えた。これらのマスメディアとの対応の雰囲気は、会議ホールでの科学的な討議の雰囲気とは全く違っていた。たとえば我々が徹頭徹尾きちんと対応した答えにさえ我々は意図的に尋ねられた。

「キエフの通りで、何千人もの人が放射線の犠牲になつて死んでいるのか?」とか、

「なぜ、ウクライナの党の指導者は、キエフからひそかに自分達の子供たちと孫を逃がしたのか?」等々。

私が最初に自問自答したのはそのときであった。なぜ科学者が、これらの問題に答えなければならぬのか？おそらく当時のソ連のあるグループが、徐々に我々をそのスケープゴートにしていたのである。

会議の間、幸いなことに私は外国の科学者と専門家との多くの興味深く、役に立つ話し合いを行うことができた。国連放射線影響委員会や国際放射線防護委員会の同僚とは別に、私は著作は読んだけれども会ったことがないような多くの科学者との親交を結ぶことができた。私は、アイゼンバッド教授（非常に有名なアメリカの放射線生態学者）との会談を今でもよく覚えている。彼は、土から草に、それから牛へと移行する放射性セシウムの動態についての多くの研究をしていた。これは、チェルノブイリにおいて我々が直面している最も緊急の問題であった。六〇年代と七〇年代、事故以前に核実験後の大気中の放射性セシウムの移行の特性を研究したとき、我々はいくつかの経験をした。アイゼンバッドが、私を招待してくれたので、私は、アメリカに行ったときに彼を訪問した。彼は、非常に親切な人であり、もし彼が私

のその時のアメリカへの訪問が本当に個人的なものだと思っているとすれば、非常に無邪気な人間であった。さらに翌年、我々はむしろ普通とはいえないような状況の下で会った。一九八七年、我々科学者グループは、核戦争に反対する医師団ということで、アメリカに行った。旅行先で私は、とりわけチェルノブイリについて話すため、いくつかの都市を回った。デンバーへの飛行の間、私はニューヨークタイムズ誌上に掲載された、チェルノブイリの破壊された原子炉から漏れた放射性セシウムについてのリバーモア国立研究所の研究者によるレポートを見ていた。三つのメディアで報告されていた、全ての核実験によって生産されたセシウム137の全量と比較して、彼が発表した数字は、明らかに誇張され、誤ったものであった。「核戦争に反対する医師団の会」という地方のグループが、デンバー空港での記者会見をセットしていた。その会議で私は、「ジャーナリストの公平なアプローチの原則は、社会心理学の影響を過大評価してはいけない。特にチェルノブイリのような重大な出来事に関する情報を提示する際には、公平性と正確さは欠くこと

のできないものだ」と発言した。

私は、リバーモア研究所の研究者と会見した際の記者による、偏見にみちたアプローチを掲載した例として、ニューヨーク・タイムズの記事を引用した。その晩、誰かが私が泊まっていたホテルに電話をかけてきて、記者は私のコメントまで自分の誤りに気付いていなかった為、編集者は掲載した記事に対する責任を感じて、すでにリバーモアの研究室と、その問題について打ち合わせたことを述べた。翌日、私の発言と記事の内容とのくいちがいに関する問い合わせを受けた際、「リバーモア研究所の研究者が、自分の計算ミスであったことを認めた」ということを知らされた。数日が過ぎ、私はアイゼンバッド教授と楽しいひとときを過ごした。彼は不意にやってくる、簡単な挨拶の後、ニューヨークタイムズの誤った記事に憤りを示し始めた。私は飛行機に乗っていたときに行った計算を彼へみせた。彼は私に、核実験とチェルノブイリ爆発から起こったセシウム137の放射能の全量の数字がどの位であるかを話した。我々は両者の結果を比較した。驚いたことにそれらは殆ど同じものであった。彼

に記事と問い合わせについての話をしたところ、彼はしばらくの間、無責任な研究者が払った代償を想像し、訂正記事を掲載した正直な通信者を賞賛した。

マスコミによって報道されたように、最初の会議の結果はソ連で出版されたが、私は（誤っているかもしれないけれども）、それらの報道が、モスクワや地方での特別な関心や反応を呼び起こさなかったという印象を持っている。明らかに、これは当時十年の間に助長された社会の無感動と無関心という風潮によるものだった。それはゴルバチョフ時代に形成されたものと考えられる。一つには、公正な選挙運動がまだ行われていなかったのだ。まだ、いろいろな社会的グループによる政治的な活動もなかった。そしてチェルノブイリ原発事故に関する秘密厳守という原則が、まだまだ幅を利かせていた。放射能汚染にさらされた共和国や地方は、放射線の状態について知らされていたにもかかわらず、これらの情報は住民には届かなかった。さらに地方自治体は、我々が推奨した住民と農地の予防的放射能測定を遵守するのではなく、食料の放射能汚染と年次放射被爆限量量については独自

の暫定的基準を決定した。一つ言い忘れていたが、科学者と専門家によって提案された推奨値は、早急には実行されなかった。

放射能汚染事故に対する専門家の、次のような公式国際的アセスメントは、注目に値する。それは以下の通りであった。

一九八九年、定例議会において、トカチェワを代表とするソ連ソビエト最高議会とベラルーシの医師団は、ニコライ・リジュコフ首相から、『国際的専門家による、公式の住民の安全に関するアセスメントと、チェルノブイリ原子力発電所での事故の結果、放射能汚染にさらされたソ連の地区と、これらの地区で実行された健康診断の影響の評価』に関する要請を受けた。

私は、ソビエト政府によってIAEAにその後送られ、汚染地域住民に関する健康調査について言及したこの要請文を、明確に文章化するために検証した。残念ながら、ブリピャチと他の近隣地区の町から避難した住民の健康に関する検査についての言及は何もなかった。放射能汚染の地域特定作業がより大きな努力と、各種の専門家達

の協力を必要とするという大変さにもかかわらず、科学者の国際的学会が、そのような追加要請に賛成したであろうことは間違いない。参加した国際的専門家は、のちにウクライナとベラルーシの科学アカデミー、そしてもちろんメディアや公式代表派遣団やある特定のグループによる、根拠のない批評に晒された。これらのメディアによる告発は、本質的に住民の健康に関して、チェルノブイリ事故後の状況が十分に把握されていない汚染地区の住民をもとにしたものであり、専門家の基本的な結論に疑問を投げかけようと言う試みであった。この巧みな作戦は、チェルノブイリ・プロジェクトに関係する人々に、深いショックを与えた。さらに、ソ連邦の科学者達は本要請文の中では何ら住民の健康調査が要請されていなかった点を指摘していたが、それはメディアからは無視された。

要請した場面に戻る。リジュコフは、代理要請の形で、三一五項目からなる国際的専門検査を行うために、すぐに二人の専門家、シュルビーナ（政府チェルノブイリ事故被害除去委員会議長）とチャゾフ（ソ連邦保健大臣）

に通告した。シェルビーナがプロチェンコ（原子力の平和利用のための州委員会議長）にリジュコフの書類を送ると、プロチェンコは彼のスタッフに、関連した指示を別の言葉で与えた。それはいつものことだった。チャゾフはより効率的だった。彼は、その翌日私に電話をして、私のアドバイスを求めた。私は、彼がシェルビーナのチームと共に働くべきだということ、そして遅れてしまうこと、代議士やジャーナリストによって告発されることになるので、早急に行動しなければならないことを話した。チャゾフは、気難しく、高度な官僚主義者であったが、こう言った。

「我々は、プロチェンコとは行動したくない。彼のスタッフは、迅速ではないからだ。我々は自分自身の道をいく。あなたは、私が要請書を誰かに書かなければならないと思いますか。」

私は、それは住民の健康の問題であるから、ソ連保健大臣が世界保健機関に書かなければならないと答えた。チャゾフは、彼の省の国際関連部門に、関連の指示を与えた。二日後、チャゾフが再び私に電話してきたとき、

彼は混乱しているようだった。彼は、ソビエト最高議会の会議が中断した日に、ゴルバチョフが彼に尋ねたと言った。

「いつ、専門家は来るのか？」と。二日間、状況は何も変わっていないかったため、チャゾフの上司（ゴルバチョフ）は不快だったかもしれない。しかし二週間後、三人の世界保健機関専門家がモスクワに到着した。当時国際放射線防護委員会の議長であったダン・ベニンソン、フランスの保健省の放射防護省の所長であり、国際放射線防護委員会メンバーでもあったピエール・ペレリンと、世界保健機関事務局内で放射線防護部門の長であるビーター・ウェイトの三人である。これが、ウェイトと私の最初の出会いであった。遠慮がちで信頼できる男である彼は、彼自身の専門分野である放射線防護に関しての第一級の豊富な経験を披露してくれた。その翌日、専門家グループはソ連保健省に到着し、そこで彼らの行動があらかじめ承認された。同日、彼らは住民に、三五レム（二五〇ミリシーベルト）という基準を適応するかどうかを話し合うための国際放射線防護委員会（ウクライナ

とベラルーシの専門家が出席する）の会議に出席した。我々は基準線量を適応する際の生理学的、生物学的、医学的な基礎データを提示し、これは詳細に論議された。世界保健機関専門家は、国際放射線防護委員会の案を承認した。その議論は、高度な専門的のレベルで、しかも非常にアットホームな雰囲気の中で行われた。私は、この最後の点を強調したい。というのは、世界保健機関の彼らの公式のレポートの中で、ベラルーシ専門家や、あるウクライナの科学者との彼らの会談が、かなり外交的なトーンで記述されているからである。事故状況は調査され、多くの問題が活発な、そして時には感情的な討論の後に論議された。後に、私は彼らが関係した「感情的な討議」を記述する。

世界保健機関の専門家のソ連での予定は、一九八九年六月十九―二十五日に、主にベラルーシとウクライナの被害地区を訪問して、現場での検査、データの分析、医学従事者と住民との面談、科学者と専門家との会談と、結論と勧告を立案化することになっていた。ベニンソン、ペレリンとウェイトには、コンデュルセフ（事故当時の

ベラルーシ共和国の衛生監査主任とソ連の副保健大臣であり、かつ共和国の代表者）が同行した。我々は、ゴメリから地域医療のスタッフと会談が行われることになっていたチェチェルスクの町まで移動した。町のコミュニティセンターに近づく、たくさんの興奮した人々が入口で専門家を待っているのが見えた。彼らは、憤然として指導者に対して何かを叫んでいた。会議ホールは詰めかけた多数の新聞記者とテレビ・リポーターでいっぱいだった。最初に世界保健機関の専門家が、彼らに課された仕事について簡潔に話し、放射線防護についての基礎的な事柄を説明した。それから多くの質問がとんだ。チェチュエルスク以外からやってきた「緑の党」の活動家は、特に活発に質問した。彼らは地方責任者と中央政府の、放射線の被災状況に関する情報不足を非難し、放射能レベルに関する彼ら自身の数字を引用して、地域住民の癌を含む罹病率の劇的な増加を指摘した。世界保健機関の専門家は、彼らの情報の疑わしい部分を明らかにするために、二、三の逆の質問をさせてもらうよう頼むのが精一杯だった。

休憩の間、精力的な女性によって連れられた人々が、我々のところにやってきた。彼らは怒った様子で、地方の行政責任者が子供たちや、ほかの人々の致死量に相当する実際の被曝レベルの真実を隠すことによって住民をだましていると我々に話した。我々は、その後の会話から、彼らがナロブルの町からきた「緑の党」の活動家であって、彼らが独自に測定した放射能レベルは、専門家による測定値よりも何十倍も高いということがわかった。そこで最後に私は彼女に尋ねた。

「誰が、その測定値をしたのだね。」

「我々自身です」と彼女が言った。

「あなたの仕事は何かね。」

「そんなことは重要でない。もちろん、我々は教授でない。我々は住民の代表なんだ。」と、その行動主義者の女性は、彼女の同僚の後押しのおかげで答えた。

「わかった。それではここにナロブルの線量値がある。」

『我々は、ベラルーシで信頼できる数字を得た』とある。あなたの数字と比較してみよう。」

「私は我々のデータを持って来ていない。しかし、

我々が正しいことを確信している。」

「よく、これらの数字を見なさい。あなたのデータとは違いますか？」

「私は、覚えていない。住民は、真実を知らなければならぬ。」

「わかりました。あなたが構わないならば、次のようにしよう。一週間以内に、二人の線量測定専門家が、あなたの町に来て、あなた達の代表者と協議し、全ての必要な測定を行ない、ナロブルの住民の被曝量を明確にするということにしよう。それらは、きちんと整理して、正式な文書に署名した上で、我々自身でそれを地方紙で発表するように地方の責任者に依頼しよう。」

実際、数日後に、サフキン（頑固な、研究室を代表する線量測定専門家）が、彼の同僚とナロブルに来了。しかし、例の精力的な女性も、彼女の同僚も現れなかった。それでもなお、ベラルーシの専門家とサフキンは、多数の測定を現場で行い、その結果を地方紙の中で発表した。人々が考えていた通り、線量はナロブルにおいて、我々のデータバンクに入力していた数字の範囲内であっ

た。

さて世界保健機関との会議に戻ろう。会議はラジオで放送されていたのだが、議論が始まって間もなく、聴衆が専門家の説明を把握していないだけでなく、聞く意志すらないことが明らかになった。彼らは、明らかに彼らが聞き慣れたものとは異なる放射線の状況の評価に不満だった。彼らの態度は、会議の終わりに変わったようであつたが、それは慣れあいであつた。ウェイトと違い、ベニンソンやペレリンは明らかに会議に失望していた。ミンスクへ行く途中で、彼らは自分達が受けた印象について話し合い、地方の人々が放射線について何も知らず、地方の医者が電離放射線による生物学的影響について、基礎的な知識すら持たなかったことに驚きを表した。黙って考えていたウェイトが不意に言った。

「状況は非常に悪い。関連知識と客観的な情報の明らかな不足だけでなく、特に社会経済の要素を考慮に入れられなければならない。」

ミンスクでは、ベラルーシ科学アカデミーのメンバーが待っていた。ベラルーシの仲間が認めたことだが、ベ

ラルーシの医学、環境科学専門領域の放射線防護に関する知識は、むしろ低いと言われなければならない。それは、共和国は何をしたのか？ 保健省の下で、腫瘍・放射線研究所は細かく専門化され、主に診断と治療に従事している。また、卒業生が主にX線専門家になるような訓練施設も存在していた。

ベラルーシのいくつかの研究所（特に、腫瘍医学と放射線医学）は、優秀な科学者（チャコフ教授）の指導の下、チェルノブイリの問題の研究に加わっていた。しかしそこには、一般的知識を持つほんの少しの専門家しかおらず、放射線防護に関しての事態收拾の困難に直面していた。一方、数学者のプラトノフと、副学長でありチェルノブイリ関連の全ての科学的な仕事を担当している機械工学のステパネンコによって率いられている科学アカデミーは、「モスクワから来た国際放射線防護委員会によって、科学的な分析や議論なしで提案された基準、特に生涯線量に関する基準」に対して反対していた。

ベラルーシアカデミーの総裁であるプラトノフは、専門家に屈しなかった。我々は一〇〇人以上のアカデミー

のメンバーが集められた会議ホールへ案内された。ジャーナリストと地方局のテレビ・リポーターがそこにいた。大統領が、ソ連とベラルーシの保健省の代表者と専門家が論議してトラブルにならないために、私に国際放射線防護委員会推奨の生涯被曝線量値について話すための場を与えた。

緊張した雰囲気と尋ねられた問題の性質から判断して、誰かがあとに続けば、活気づけられることは、明白だった。ベニンソンとベレリンが放射線防護の国際的な原則について話したとき、聴衆は落ち着きがなくなっていて、時々叫んでいた。ベニンソンが三五レムの被曝基準というものが非常に保守的であると述べると、雰囲気は特に熱くなった。専門家の意見として、より現実的な基準はと聞かれてベニンソンが答えた。

「三五レムの二倍から三倍」

すざましい騒音、叫び声、手を叩く音が聞かれた。ベニンソンに続いてベレリンは、住民に、フランスと中国において行われ、世界中でかなりよく知られている調査を例に挙げて、健康上の放射線の影響を説明しようとし

た。この完全な分析は、悪性疾患の頻度が、新たな放射レベルでは、地区に住んでいる住民の間で増加していないことを証明するものだった。

ベラルーシの特殊な状況は、放射性セシウム、ストロンチウムとプルトニウムによる汚染、すなわち放射能と化学物質の複合汚染によるものだという地方科学者の反対意見はトーンダウンした。チェルノブイリに関連した汚染の特徴を完全に研究していた専門家は、三〇キロメートル地帯を越えると、ほとんどプルトニウムが検出されず、ストロンチウム90も最大許容値以下であることを知っていた。したがって彼らは、ストロンチウム90だけでなく、住民が被曝したセシウム137とプルトニウム239の量についても質問した。わかりやすい答えがなかったので、ベニンソンは、可能な被曝効果判定の唯一の基準が、土地や食料中の放射能の問題ではなく、人体に吸収された線量であるという有名な事実を思い出した。

その議論は、休憩なしで五時間以上に続いた。この場面においてきっぱりと専門家との議論を拒否した人々は、聴衆から拍手喝采をうけた。ついにベニンソンは怒って、

発言のために立ち上がった。彼は言った。

「私は、世界のいろんな国で、非常に重要な問題が論議されるような何十もの科学的なフォーラムに参加してきた。しかし、私をはじめて科学者の会議に出席した時、ベラルーシ科学アカデミーのメンバーは、科学的な問題を、プロフェッショナルな方法でも議論によってでもなく、拍手のみによって解決していた。私はこれに同意することができない、そして私は理解することもできない。」

会議は終わった。そして世界保健機関から来た我々の同僚は、科学アカデミーを去った。

我々は惨めなムードの中に消沈していた。

遅遅と、専門家達はキエフ（ウクライナの首都）まで飛行機で行くことになっていた。空港へ行く途中、我々は訪問の結果を報告するために共和国のテレビスタジオに寄らなければならなかった。疲労した専門家がカメラの前の座席に座って、一時間の会見を終えたのは、もう真夜中近くであった。ベラルーシ科学者の反対意見への疑問について、気転のきくベレリンは、丁重に、彼ら自

身の分野においては、彼らが偉大な専門家であると賞賛した。それから、彼は続けた。

「しかし、放射線防護における専門家になるためには、数年以上絶え間ない努力をしなければならない」と。

朝四時に、我々はキエフに到着した。九時に、ウクライナの科学アカデミー、研究者と新しくつくられたソ連科学アカデミーセンターの国立医学放射線センターのスタッフの代表者との会議が始まった。

私はこの会議が、ベラルーシでの会議とは異なっていたことを認めなければならない。副総裁のスコック（生物学者）とグロジンスキー（放射線生物学者）を含む全部で八人の共和国科学アカデミーからなる小さいグループは、静かに専門家の話を聞き、以降の議論に参加しなかった。私は、この日参加したウクライナ科学アカデミーのメンバーが、なぜアカデミーの世界保健機関専門家と一緒に会議を組織しなかったのかが分からない。

専門家は、明らかにこれにとまどっていたが、コメントをしなかった。

キエフでの専門家達の滞在スケジュールに従って、ウ

クライナ保健省首脳はベレリンに、緊急のコントロール地区に位置するナロディッチの町を訪問するよう頼んだ。

そこで彼は、地区指導者や新聞記者に会った。彼は、線量計でいろいろな場所や建物等を調べた。その後彼は、放射線量がより高かった場所の堆肥を見せられたと話した。なぜ地方の指導者が堆肥をためて、規則的な除去や埋立をしなかったのかという質問に関して、ベレリンは明確な答えを得られなかった。専門家達は、規則的な汚染除去測定の一必要性に対する地区指導者の注意をひき、放射線防護に関するたくさんの勧告を提供した。

「私は、いろんな印象をうけた」と、ある専門家は旅行について言った。「肥料の積み重ねが、多数の訪問客に、放射能がこの町で本当に高かったことを証明するために、故意にみせられたのだ」

以上の訪問の結果、しばらくして専門家達は、ソ連に送るための世界保健機関へのレポートを準備して、出版した。私が、その結論のいくつかを引用することは不適當でないと思う。

「専門家達は、生涯における他の危険と比較して、放

射線被曝による健康への危険が非常に少ないことは確実である、ということに同意した。」

三五レムという値は、電離放射線が健康に与えるリスクの国際的なアセスメントに基づくものである。疫学と放射線生物学では、大規模で詳細に記録された長期的な研究がなされている。チェルノブイリ事故に関しても専門家達は線量が適切な基準だと感じていた。それは、基準を少し変えてやることで、どんな状況にも対応できるからである。引き出されたレベルは、特定の地方の特殊な条件の中の実際の適応のために開発されたものとしてはよいが、一次制限としての基準ではなかった。

専門家は、もし彼らが生涯における被曝量の基準を決定すること要請されたら、三五レムより二―三倍高い値を採用するであろうと言う話をした（新しい基準が七レムという許容範囲を設定したという風潮は、この点で撤回するべきである）。

放射線防護の専門家でなかった社会科学者が、会議で原則を十分に理解していなかったことは明らかだった。例えば、普通の時と、事故によって混乱しているときの

住民の反応の違いは、考慮を必要とするかもしれない。

これらの変化は、特に普通の生活での疾病の発生率が未知であるときは放射線被曝のせいに帰されることがない。むしろより心理的要因とストレスによるものかもしれない。放射線に対するこれらの諸作用は、住民への心理的圧力、そして健康問題に関係があるストレスを引き起こすだけでなく、放射線の専門家の能力に対する信頼や不信を微妙に誘発する。これは提案された値そのものに対する疑いを生じさせた。緊急事態時に考慮すべき事は、社会と科学者が、正しく住民を守るための対策を確実に作ることができるような教育プログラムの制度を作ることである。

さらに多くの科学者は、利用できる情報の不足を感じていた。世界保健機関の専門家や放射線防護の専門家は、彼らがソビエトの科学者が全ての情報にアクセスできるようになり、そしてそれが有用な物ばかりであるなら喜びを感じたであろう。しかし、そのデータが自由に利用できるなかった場合、共和国の科学、医学者を通じて、あらゆる努力を通して正しい情報、規則的な一定のルー

トの下で利用できるよう準備しておかなければならない。事故対策におけるかなりの関心が、放射線と他の環境要因によって惹起される複合増悪的な効果について払われた。専門家達の声明では、提案された許容線量において、他との増悪関係はみられず、生涯線量が確実に三五レムを上回らないように徹底させるべきで、その為に、大規模な線量測定と計算が必要であるとはっきりと述べられている。

専門家達は、住民を移動させるための三五レムという生涯線量の基準を設定したが、地域の条件、関係コストと個々の条件に基づくべきであり、全ての状況において固定された線量で行われるべきではないことを確信していた。

専門家達は、チェルノブイリとその余波の悲劇に立ち向かう人々とソビエト科学者の努力を賞賛した。

専門家達は、汚染した食べ物に含まれる基準線量と、欧州共同体での基準を基にして作られたソビエトの基準が、世界保健機関ガイドラインより低いという点を示した。また、汚染されていない食べ物の輸入と消費が実行

可能であるならば、食料からの体内へのかんりの量の被曝量を減らすであろうということが報告された。また、食べ物を加工処理し、ろ過すると、食べ物の汚染レベルを減らすことができるということも報告された。

「この大災害に携わったソビエト科学者によって得られた経験は、彼らを事故管理の最前線の中に放り込んだ。そして彼らは、他の国から非常事態計画の開発に關して援助を受ける機会を得た。この専門的知識を利用して、プログラムが非常事態準備に向けて、該當する組織において利用できるようにされることが望まれる。」

この点について、私は以下のチェルノブイリ後のエピソードを思い出す。一九九〇年に、ウクライナによって主催された三五レム基準についてのX線専門家と放射線学者の會議が、キエフと地方で行われた。医科学アカデミー科学腫瘍センターのヤルモネンコ教授が、Meditsinskaya radiologiyaという雑誌の中で彼のこの會議についての印象を記述した(Na 6, 一九九一)。

彼が書いたことを記載する。

「私は遠い過去を思い出す。三五レムという生涯線量

は非科学的であり、容認できない。メンデル説カワイスマン説、つまり染色体遺伝理論あるいは、その選択肢の概念による三五レムという生涯線量が、生物、非生物やその他の生活様式を述べたミチュリンの生物学が変化していったように、言葉が置き換わっただけである。長い間、いわゆるブルジョワの概念である『打たれた原則』『目標理論』と『非人間的な』放射線の基準が、自家製の理論と取り替えられた。科学の世界で受けられた公理の無知がそれ自身を野心の下におおい隠すように、この基準は、同じ立場から、そして同じ方法で攻撃されるものである。」

キエフの會議に出席して、いろいろな病因論的な話をした多くの人々によって詳しくなされたヤルモネンコの分析は、住民と実験動物における一致を見た。

「それは説明するは簡単である」と彼は書いている。「世界科学の常識と同じものを持たない人によって提示された情報であることを。」

簡単に言う、彼らは少量被曝による発ガン性の効果を評価するための実験を支配する、非常に厳しい規則や

過去の論文には固執していないということである。しかし、私は、以下のように指摘する。大胆な主張は、単独では不十分であり、そのデータの信頼性が乏しいとき、リポーターと違って専門家は、科学的な論文を基にするのが原則である。不幸にもまだ、この種類の記事が発表されておらず、チェルノブイリ事故に関する多くの本はこの種の『(偽の)プロの』データであふれている。

それから、ヤルモネンコはバラボーイ(会議で三五レムという生涯被爆線量を容認できないとして、古い年間〇・五レムという基準を保持する案を提出した地方の放射線生物学者)の「有能な」意見の例を挙げた。ヤルモネンコ教授の文はこの言葉で終わる。

「私は、専門家の意見を専門家が無視することを非難する。そしてさらに、汚染地区で苦しんでいる住民に与えられる厳しいストレスによる影響を克服する方法を考え出す際や、実際に彼らの健康を改善する際に、彼らの経験と知識を利用することが必要だと思う。私は、世界科学の発見が無視され続けられるなら、そして我々の忌まわしい歴史のように、権威主義者が都合のよい決定を

するならば、新たな道徳と社会の混乱がくると考える。」同じ号には、ヤルモネンコの意見に賛成した、オブニンスクの医科学アカデミー医学放射線教授であり、研究所の指導者の一人であるデデンコフの総説が掲載されていた。

彼は、こう書いている。

「科学的な真実は、直接選挙や、個々の意見を無視することによっては、決して得られなかった。我々の歴史は、たくさん悲劇的な例を知っている。例えば、反対者を沈黙させて、社会の注視の元で彼らを疑うと、遺伝学分野の研究が初期段階に戻り、この国の生物学の科学的基礎の仮想破壊につながるということ。」

ベニンソンのグループが帰るとすぐ、共和国の新聞、国営放送の記者らが質問を浴びせた。非常に精力的な努力が、そのほとんど罵りの言葉で覆われ、平凡な作家でもぞっとするような風聞調の本を作るために費やされた。私は、自分の本をこれら「傑作」からの引用で汚したくもないし、彼らのばかばかしい告発を分析するつもりもない。しかし、一つだけいっておきたい。

そのような悪意に満ちた欺瞞の行動は、国の外だけで可能である。文化的な国では、正当な処置がそのような人々になされ、彼らは自分の苦しい言い訳を説明する場を持つことができるからである。

予想通り、新聞、ラジオやテレビ番組は専門家の非常に簡潔なレポートに、多くのスペースを割かなかった。しかし、チェルノブイリについて書いたジャーナリストの中にも、事故でおこった出来事に対して、彼ら自身の意見を述べた記者がいた。

その中の一人が、キエフからきたイブニングキエフという番組のアレキサンダー・シドレンコであった。彼は、一連のレポートと有能な科学者へのインタビューを放映した。私は彼に尋ねた。

「アレキサンダー、なぜあなたの新聞は専門家の意見の全部を掲載しないのかね」

「編集者が、人々はそれを望んでいないと言ったからですよ」

私は、専門家達との放射能汚染地区への訪問、会議と議論を行った。アセスメントの客観性に対する責任と、

提案された勧告の正当性を示した、三人の専門家によって署名された世界保健機関への公式レポートは、一部の例外を除いて、ソ連の指導者を含む国民にはほとんど効果がなかった。理由は明らかだった。専門家の意見は、事故の影響と関連して、政治的なグループによって作られていた、社会政治的、社会心理学的風潮に合わなかったのだ。さらに、科学的な仕事上での誤りの訂正や身の潔白を証明しようとした科学者を、「自然放射能レベル以下の放射線被曝が健康に危険だと主張する、国際的な経験のある偽論客」と思い込ませることで、専門家の発言を信用できないものに仕立て挙げたのだった。

第二章 チェルノブイリ国際プロジェクト

はどのようにしてできたか。ウィーン会議。二〇〇人の専門家の結論と勧告。しかし、彼らは、国際的な核のマフィアの代表者と非難される。

国際的な放射線関係の専門家による調査を整理するよ

うにというリジュコフの指示が、二つの異なる部門の長であるシエルビーナとチャゾフへ送られたことは既に述べた。核エネルギーの平和利用のための州委員会が、IAEAの刊行物を承認したのは、わずか六カ月後であった。一九八九年十月、前述したように、ソ連政府からの公式要請がIAEAに提出された。それによって、二〇〇人以上のいろいろな国際的組織と世界のさまざまな国からの専門家からなるチェルノブイリ国際プロジェクトが作られたのである。

以上の経緯の中、ソビエト政府からのこの要請を受けたIAEAのリーダー達は、この非常にデリケートな状況に気づいていた。そこで、以下のような適切な決定がとられた。つまり、世界保健機関、国連放射線影響委員会や、FAO（英国食料農業機構）、国際労働機構、世界気象学機構、IAEAや欧州共同委員会（CEC）といった、いろいろな国際的組織の委員会がこのプロジェクトに参加したのである。

これらの組織は、プロジェクトの管理を依託された、責任ある一〇か国と七つの国際的組織と科学者からなる、

プロジェクトの国際諮問委員会（IAC）を形成し、結果に対する責任を負うことになった。広島放射線影響研究所所長であり、放射線疫学の世界的権威である重松逸造教授が、委員会の委員長に推薦された。プロジェクトの枠内で、参加している人々は、放射線学や心理学、一般医学といった、異った分野を代表する有名な国際的な科学者を各国の研究所や大学から招聘した。

このように、それぞれの国際的な科学者から構成されたグループは、そのプロジェクトと結果に対して責任を負っていた。

この状況、つまりチェルノブイリでの調査を広く門戸開放するという考えは、IAEAによって実行された。与えられた権限の範囲内で、IAEAは、プロジェクトメンバーの作業を調整する管理上の責任を負っていた。つまり、専門家がソ連に滞在している間の旅行の予定を調整していた。だから、IAEAが専門家に影響を与えたというのはおかしいし、ばかばかしい推測である。

これら全ての推測は、愚かなものであった。残念ながら、我々の国で、メンバーが個人的に責任を持つ、独立

でオープンな専門家のアセスメントが、世界共通の常識であることを知る人はほとんどいない。科学者や専門家は、自分の評価を一番に考えるので、彼らが賛成できないものに署名することはない。しかし我々の国では、公式の意見決定の場において、誤っている結論に達した場合でも、個人の責任を問わないという条件で専門家が関与している。法令や法律は、しばしばその分野の専門家にとっては明らかな不条理を含んでいるものである。前述した「一年につき一ミリシーベルト」等は、そのいい例である。

もう一つの反対キャンペーンは、ソ連最高議会とマスコミにおいてなされ、特に西側の科学者に衝撃を与えた。それは、専門家が、IAEAとソビエト政府によって買収されたというものである。しかし、実際、プロジェクトに参加している各国の専門家は、彼らの仕事に対するソ連邦からの報酬をもらっていないかった。彼らが働く研究所や大学が、彼らの通常業務に対してではなく、プロジェクトに対する報酬を払い、彼らに必要な設備、道具と材料を提供したのである。たとえば、メットラー（プ

ロジェクトの医学グループの責任者）は、多くのアメリカの会社や研究所から、特殊試薬の国際的専門家チームに対するサポートを受けて、非常に複雑で骨の折れる分析を実行していた。さらにメットラーは、我々の研究者に対し、チェルノブイリ地区住民の甲状腺の検査のために必要な、高価な特殊試薬を無料で提供した。

ソ連政府は、いくつかの部門からなる組織が、プロジェクトの実行を援助するという特別な指示を発表した。そして、一五〇万ルーブル（ドルでなく）が、ソ連の専門家グループが現地で仕事をするための費用として割り当てられた。これの、どこがよくないというのだろうか？ しかし、アダモヴィッチやシェルバックといった人々は、ソビエトのマスコミを通じていろいろな非難を發表し続け、「専門家は買収されており、世界の核マフィアの代表だ」とこきおろした。ウクライナソビエト最高議会のチェルノブイリ委員会における、法律についての部会でのヤヴォリフスキーの演説は、失笑を買うものであった。ヤヴォリフスキーは、ウクライナソビエト最高議会のチェルノブイリ委員会の委員長であり、チェ

ルノブイリの悲劇を利用することによって、彼の政治的キャリアを成していった男である。彼は起立して、ソビエト政府が、子供の健康管理に費やす代わりに、二〇〇万ドルを国際的なチェルノブイリ調査の専門家に払ったと論じた。私は、この部会でのゲストであった。これらのうそを聞いて、代議士が何もいわないのを見たのはショックであった（彼らの多くは真実を知っていたけれども）。しばらくして、私はメットラーに、モスクワを訪問してきた際に、将来のウクライナの大統領候補にもなる男のこのスピーチについて話した。彼はしばらくの間考えて、それから穏やかな顔で返事をした。

「まず、もし政府が我々にお金を申し出ることになっていても、誰もそれを受けなかっただろう。我々はただ自分達の義務を果たしただけだ。第二に、率直にこの紳士と話をするために、私が、自分の予算から、チェルノブイリ・プロジェクトの医療プログラムのために、どれくらいのドルを費やしたかを弁明する準備がある。」

文字通り、チェルノブイリ国際プロジェクト参加者をショック状態に入れたもう一つの出来事は、ソビエト政

府のやりかたであった。

読者は、住民の安全のために国際的専門家のアセスメントを行うために公式要請をIAEAに提出したのは、外ならぬソ連邦政府であったことを思い出すであろう。そして国際放射線防護委員会は、チェルノブイリ事故の結果、汚染した地区の住民のために、健康調査をこれらの地区で実行したのである。

国際的な事故調査の共同プロジェクトチームは、非常に深刻にこの要請を受けとめ、この調査の結果が、ソ連政府がこの非常に重要な問題に適切な決定をとるための今後の手助けになるであろうと考えていた。実際、これらの結果は、事故の影響を除去するための長期的な計画を立案するために必要とされていた。しかし、行政組織や社会的運動は、特別な補償プログラムが可決されることを主張し、メディアや自分自身をこの調査から混乱させた。

しかも、ソ連政府や議会は、完全に専門家の意見を無視した。プロジェクトがまだ進行中だったときでも、政府は一九八六年の避難より大規模な集団移転を想定した

緊急手段のプログラムを採用したりした。この影響に
いての解決策は、一九九一年の五月中頃に発表された。
一九九一年五月二十一—二十四日に、チェルノブイリ国
際プロジェクトについての最終的なレポートを論議する
ために開催されていた国際会議は、ソビエト政府にレ
ポートの提出するスピードを上げる方法について議論し
ていた。その会議の参加者は、できるだけ早くレポート
を提出することが、ソビエト政府にとって非常に重要だ
と思っていた。

最終的な議論の間、ゴンザレス（プロジェクトの管理
上の責任者の一人）は、一枚の紙を持って会議場に入っ
てきて、話しをしたいと叫んだ。彼は、上記の解決策に
ついての基礎的な規定を読み出した。ソ連、ベラルーシ、
ロシアとウクライナの代表派遣団、特に、ソ連代表派遣
団の責任者であるグバノフに彼が尋ねた。

「グバノフよ、この解決策にどう反応すればよいのか。
政府の勧告を実行した世界の指導的科学者によるチェル
ノブイリ・プロジェクトの組織化と実行にそれほど多く
の努力を払うのはなぜなのか？ 私は、議会や政府が、

彼らが行った要請が通るのを待つことなく決定を下すな
ど聞いたことがない。解決策は、我々が決定した放射線
被曝レベルや、住民の集団移転のような逆の効果につい
ての結論を考慮に入れた、集団移転のような許しがたい
行動についてプロジェクトの多くの世界的科学者が合意
した勧告に矛盾している。」

遠慮がちで冷静にみえるグバノフは、自分が厳しい状
況ににいるのに気づいていた。彼は話し始めたが、彼の力
ではどうにもならないことに気づいていた。彼は、ソ連
側におけるチェルノブイリ国際プログラムの公式の責任
者の一人だったが、彼に発言の余地がないことは明らか
だった。この出来事は、世界共同チームに、ソビエトの
指導者の誤った姿勢の一面をもう一度示した。

ソ連のチェルノブイリ・プロジェクトの組織化の作業
は、モスクワでの、ゴンザレス博士とソビエト研究所の
代表者での間の、プログラムの科学的、技術的な面での
国際的専門家の提言についての論議から始まった。本質
的、客観的な科学的なデータを得るために、住民の検査
は汚染地区だけでなくコントロール地区でも実施されな

ければならないということが会議で確認された。我々は、検査対象住民は、専門家によってではなく、共和国によって選ばれるべきだと提案した。さらにプログラムでは、食物の品質と、生活習慣上の必須の食べ物についての住民の貯蔵についての評価も取り入れなければならないとした。最後に、食料中の鉛、カドミウム、ホウ素と血中飽和砒素の測定が、プログラムの医学分野に必要な要素として提案された（ミンスクにできた新しい研究所の放射線医学研究者は、子供たちの血中で鉛を発見し、これは、破壊された原子炉のカバーが開いてしまい、環境へ鉛が大量の漏出した結果であると発表した。彼らは、調査の方法についての科学的批評が厳しい日本での会議でこれを発表した）。

プロジェクトが詳細に論議された会議には、ベラルーシとウクライナの科学アカデミーの代表者が出席していたが、汚染除去労働者や避難住民に調査の対象を広げることにについて、何も発言しなかったことが気になった。チェルノブイリ・プロジェクトの結果をまとめたウィーンでの最終会議での話になるが、バリアフタール（ウク

ライナ科学アカデミー副総裁）は、ウクライナの代表派遣団が専門家の結論と一致しなかった理由のうちのひとつが、彼らが汚染除去労働者と避難した住民を網羅していなかったからだと述べた。

翌年から、多くのグループの国際的専門家が意見を交換し、必要な情報を得るために何十ものソビエトの研究所を訪問した。モスクワの生物物理学研究所で、我々は専門家に、ロシア、ベラルーシとウクライナの避難地区と異なる地区での、環境放射能と被曝線量の評価に関する多くのデータを提供した。我々は、いろいろな計算方法を論議して、専門家の希望通り、住民への医学的検査を含む全てのデータを提供した。各国の専門家達は何回も、仕事のために必要な情報をこんなに多く受け取るとは思っていなかったと述べた。専門家は、何人かのジャーナリストが主張するように、我々の情報を、単に彼らが結論と勧告をまとめるため基礎としてのみ使ったのだらうか？ 何もわからない。彼らは、このプロジェクトの作業のうちのひとつである、ソビエトの科学者の方法と知見に関する完全な分析を行った。なお、プロジェ

クトについての最終的なレポートの中で、全てのこれらの知見は、公式のデータと方法の評価に関する特別セクションの中に含まれている。さらに、専門家によって得られた現場での全てのデータ（レポートの中で詳細に提示する）が分析され、地方や共和国の結果と比較された。最後に、専門家の結論に加えて、事故の影響を除去するための勧告と提案が採用された。

この点で、全部で世界中の二五ヶ国から二〇〇人以上と七つの国際的組織の専門家が、ソ連へ五〇回もやってきた点は注目する価値がある。六ヶ国の異なる研究所が、多様なサンプルの何千もの分析を行った。五ヶ国の政府と個人企業が、材料と設備のための専門家や線量計、コンピュータを提供した。専門家達の知的所有権とともに、全てのこれらの研究の結果は、ボランテニア精神に基づき、無償でチェルノブイリ国際プロジェクトに提供された。

技術的報告書（一、〇〇〇ページ以上からなる）の仕事が終わった段階で、三つの共和国の専門家達は、国際的専門家によって準備された試料による詳細な研究のため

めに、ウィーンに招待された。これは、彼らが利用できるソビエトのデータと関連づけられるかもしれない大切な事項を学ぶためであった。

我々外国の研究者には、共和国（特にウクライナとベラルーシによって）に提供されたデータに関して、確認を要するたくさんの質問があった。一般に専門家達は、住民の疾病率と、特に、異なる保健所によって出された、同じ地域の矛盾する数字や自然発生的な疾患の健康統計の登録などについてかなり混乱していた。ウィーン会議で専門家達は、共和国の保健省の代表者と、統計のレポートを、絶えずそして根気よくチェックした。時々、ソビエト代表者の明らかに政治的な、裏切りを思わせるような奇妙な出来事にも遭遇した。たとえば、ポビレワ（ウクライナ保健省の代表）は、ジトミール地方の汚染地区の住民の疾病率の表の中の数字がレポートの中の数字より大きい値と置き換えられていると指摘した。メックトラーは尋ねた。

「ポビレワ、どういう意味だ？」

「これは、ウクライナ保健省の新しいデータです。」

「どうやってそのデータを手に入れたんだろうか？」

「保健省ジトミール支部からの統計レポートを基礎としています。」

メットラーは、専門家がジトミールからもらったのと同じ保健省からの公式レポートのファイルを受け取っている。これは、彼らが我々と保健省に違うデータを与えていたことを意味するというのだろうか？ わからない。ウィーンでの共和国の代表派遣団のリーダーは、多くの機会において、統計データを自由にする特権を持っていた。さらに彼らは、しばしば願望と現実を取り違えていた。例えばIACセッションで、ウクライナの代表派遣団長であり、ウクライナ科学アカデミーの副総裁であるバリヤフタールは、チェルノブイリ事故によって、一、〇〇〇人もの放射線熱傷が登録されたと述べた。彼がこの数字の根拠と、記録した場所を尋ねられたとき、彼は、これが共和国保健省のデータであると答えた。しばらくして、キエフにおいて、私は保健大臣スビジェンコに、当惑させるような質問をした。

「アカデミー副総裁は、どこでそのデータを得たのか

ね？」答えはなかった。

会議で起こったもう一つの出来事は、より不快でさらに悲劇的だった。ベラルーシ代表派遣団代表はケニック（チェルノブイリ問題担当政府会議副議長）であった。

彼は非常に実直な人であったが、本人は気づいていないだろうが、複雑で理論的な問題を理解できていなかった。彼は、セッションの開会式の前に私に会い、彼が発表することになるレポートは、多くの医学的データを含んでいると述べた。私は、医学的データが非常に重要だと答えたが、大切なことは、あらゆる数字が全て実証されているかどうかということであった。ケニックは特に、事故後の住民における疾患の上昇率についての説明と、特に肝炎やインフルエンザのような疾患についてのレポートを注意深く読んだ。そのデータは、明らかにベラルーシで行われた専門家の調査を基礎として作られた結論とは異なっていた。皆がメットラーを見た。彼は最高会議幹部会の近くに座って、コンピュータで計算をしていた。最後に議長は、彼に発言権を与えた。メットラーは、セッションの二時間前に、チェルノブイリ事故以前の住

民の間の疾患の割合を示している表形式のベラルーシの公式データを受け取ったと述べた。これらの数字が、ケニツクのレポートの基礎を形づくっていた。さらに彼は、そのスクリーン上のこれらの表を表示して、ゆっくりと分析し始めた。表の中のいくつかの数字は、赤いマークで強調されていた。メットラーは、明らかに誤った、そして不合理な数字を示していた。彼は、多くの疾患が増加しているというケニツクのレポートの結論は、公式データの客観的分析とは関係がないということを示した。緊張が静かな会議場を支配した。メットラーが彼の分析を続けたので、専門家の罵声はより大きくなった。私は、ケニツクを見た。彼は頭を下げ、目線を上げなかった。休憩の間、グシュコワと私は、ケニツクのところに行った。彼は、非常に動転して言った。

「彼らは私を失望させたというのに、どうして私がその科学者のいうことを信じることができるというのか？」

後に、彼はしっぺ返しをした。ウィーンから戻ってきてから、彼は全ての「専門家」を集めて、いわば圧搾機

によってしばり抜いたのである。

ここで、ソ連の歴史上前例がない国際的専門家の調査結果の内容をちょっと見てみよう。作業の終了後、IACは三巻からなる本を出版した。第一巻には、得られた結果、結論、そして勧告を含むプロジェクトのあらゆる面についての技術的レポートが、七〇〇ページに渡って詳細に書かれている。第二巻は、国際諮問委員会の報告書から提示された技術的報告の抜粋である。最後の第三巻は小さいもので（ロシア語で三二ページ）、普通の本の形を取っている。それは、わかりやすい言葉で、プロジェクトの基本的な結果と、専門家によって提示された勧告を記述している。

これらのデータを得ることは、西側諸国にとっては問題ないことであるが、我が国の科学者にとっては、IAC版の国際チェルノブイリプロジェクトのレポートはたった二五、〇〇〇部しか出版されておらず、さらに人気の高い「放射線影響実験と予防的手段の評価」は、たった二、三〇〇〇部しか印刷されなかったので、手にいれることは非常に難しかった。

IACの報告書において、重松逸造教授はこう書いている。

「チェルノブイリ国際プロジェクトチームは、彼らのすべての専門的知識と経験を、放射線被曝の影響と被曝に関係がない影響を分類することに用いた。彼らは現状を理解し、チェルノブイリ事故の結果を軽減するための新たな手段を得るため、膨大な量のデータを入手し調べた。IACは、独自に科学的に権威のある研究を実施する準備と、簡便で信頼性があり、研究の方向性の決定を手助けしてくれるようなレポートを提出する準備を始めた。今後時だけが、我々の貢献の重要性を示してくれるだろう。」

結びのフレーズが、その奥に横たわる様々なものを暗示している。年が過ぎ、辛抱強い我々の祖国における知識と無知の間のギャップは、間違いなく縮まり始めている。チェルノブイリにおいて、無知はしばしば知識に置き換わり、神秘主義と野心が本物の科学を凌駕した。あいにくこのプロセスは、線量測定、放射線生物学や医学の知識以外の学問上の地位を持っている人々によって、

大いに増長された。グバレフ（高名なジャーナリスト）は、チェルノブイリ国際プロジェクトの結果について次のように書いた。

「彼らの結論は、我々の社会における常識とは異なっている。それが発表されたとき、住民が反対したのは明らかである。理由はいろいろある。五年という長い間、科学者や政治家、普通の人々や公人、専門家や煽動家が、住民がガンの発生のために徐々に死んでいくとか、子供たちの状況が重大であるなどということを我々に話しかけた。感情が支配し、被害者は実際の援助を受けられなかった。医療を必要とする場所では大集会が行われた。そこで彼らは、効率的な医療援助と、政治的秩序がつけられることを必要としていた。スローガンは真実の代用にされた。」

まさに、そのとおりである。しかし、グバレフは一つのキーポイントを見逃していた。彼は、始めからヒステリーをかき回すの手伝い、「四番めの権力」として、チェルノブイリ周辺の社会的、心理的状况を形成したことに対する責任がある人々については何も言及しなかつ

た。それは主に、世界歴史において前例がないほど、放射線による精神的動揺や心理変化に寄与したジャーナリストやメディアであった。

IACレポートには、結論についての部分がない。そこでこの本の範囲内に入ることだけを考慮しよう。

専門家が直面する大切な作業の一つは、放射能汚染地区でソビエトの専門家によって得られた測定値と、データの質を評価することであった。推奨された測定方法が、正確な被曝量の精度に依存し、事故の影響を減らすと考えられていたので、これは非常に重要な作業であった。レポートにはこう書いてある。

「測定値とその評価は、プロジェクトチームから有効であるとみなされた、公式レポートで報告されたようなセシウムの表面汚染のレベルの裏付けを決定するための方法によって行われた。プロジェクトチームによって得られた土壌サンプルから得られたデータの解析は、プルトニウムの表面汚染は確認されたが、ストロンチウムによるものより低いというものであった。調査地区で測定された飲料水や、ほとんどの食物中における放射性核種

の濃度は、国際貿易における食物中の放射性核種汚染についてのガイドラインレベルよりかなり下であった。」
住民への放射線被曝については、

「線量を推定するため手続き（すなわち我々の方法）は科学的に正しいものであった。使用された方法は、線量を過少評価しないような結果をもたらすものであった。外部及び内部被曝によって人体に入ったセシウムからモニターされた個々の住民のそれぞれの測定値は、計算モデルを基礎として予測された結果であった。独自の調査プロジェクトが、汚染地区の線量が公式に報告された線量より低かったと評価した。総体的に、合致した成績は二、三個しかない。」

汚染地区に住んでいる調査対象住民の健康に関する、基礎的な結論に関して、IACレポートにはこう書かれている。

「すでに放射能によるものであると報告された健康への影響については、地方での研究や、各プロジェクトでの研究では十分に因果関係を見い出せなかった。共和国や地方での医療機関の仕事と活動を分析して、専門家は

『健康についての問題に直面している地方の臨床研究家の多くの知識は乏しく混乱しており、しばしば矛盾した結果を生んでいる』としている。これらの失敗の理由のなかには、地方での研究維持の設備や資材供給の不足、乏しい知識と科学的文献へのアクセスの不足による情報不足、そしてよく訓練された専門家の不足があった。これらの障害にもかかわらず、多くの地方での臨床の研究は慎重に、そして効率的に実行されていた。しかし調査プロジェクトチームは、ほとんどの臨床データや報告されたケースで同様に放射能との因果関係を得ることになった。」

さらに専門家は、現場での調査の結果、『放射能に関連しない健康障害が、汚染地区とコントロール地区にみなかったが、直接放射線被曝によって増加している明らかな健康障害はみられなかった』と述べた。調査した子供たちは、一般に健康だということが判明したのである。フィールド研究では、汚染地区とコントロール地区で、大人において相当な数、つまり一〇—一五%の人が医療を必要とする医学的健康問題を持っていることが示され

た（成人高血圧患者を除く）。同時に専門家は、事故によっていつまでも続く不安定さと不安感、ソ連で起こっている政治的変化と社会経済的に引き起こされる出来事が、心理学的にマイナスの結果になったと結論付けた。放射性核種で汚染された地区住民の健康に関するチェルノブイリ国際プロジェクトの基本的な結論は、一九九〇年当時の状況を正確に反映している。

我が国で、これらの基本的な結論に対して行われた主な議論には、専門家がコントロールスタディを行った結果に対して従来の住民の多くをカバーする共和国の医療統計学者によるデータとの乖離が見られたが、これには医療部門についてのプロジェクトも含まれていた。それによって、チェルノブイリ地区の登録疾病数が、他の地域と比較して上昇するという奇妙な現象も表面化していた。この種の議論はきりがない。まず、我々がケニックのレポートで見た統計学の質。なお、プロジェクトも医学統計学の専門家の評価を受けた。専門家から出された数字は、技術報告書において分析された。それらはしばしば矛盾していて、根拠のないものであった。一つの例

がここにある。共和国の統計によると、モギリョフ地方で貧血症の大きな増加がみられた。一九八七年には一〇三例であつたが、一九八八年には八四三例であつたといふのである。一方、やはり事故によつて被害を受けた近隣のブリヤンスクでは、一九八七年に一二二例が登録されたのに対し、一九八八年一年間では二五例が登録されただけだつた。専門家は、そのような比較法では違いを比較することはほとんどができないと指摘した。

第二に、一番大切なことなのだが、疫学的調査は、医学統計学の単純な比較とは基本的に異なる専門家によつて実行された。それはつまり、汚染地区とコントロール地区がほとんど同時に、同じ専門家によつて、同じ方法として同じ試剤と道具を使って調べられたのである。さらに調べられる人々は、患者の中のボランティアに基づくものではなく、無作為に選ばれた。

チエルノブイリ国際プロジェクトのずっと前、保健省や地方自治体は、我々の繰り返し要請にもかかわらず、公正を目的とするためのそのような疫学調査システムの必要性に関して、注意を払おうとはしなかつた。彼らは、

我々の案を原則的に受諾したが、いつもコントロール地区の資金、設備や専門家の不足に言及した。

読者は、こう疑問に思うかもしれない

「それならばなぜ、検査を行い、コントロール地区で同時に同様の仕事をする人々の数を半分にしなかつたのか」と。

適切な評価を確実なものにする、この非常に合理的な改革は、医学界にとつても住民にとつても、また自治体にとつても都合のよいものではなかつた。彼らの要求は異なつていた。つまりそれは、住民一〇〇%の全身的、一般的な医学検査である。我々の能力を越えた科学的な問題であるコントロール地区に関しては、彼ら（科学者）が言及しなければならぬ問題となつていた。医学的観察の方法は心理的には理解されたが、絶対に非現実的な要求であつた。もし十分な医者がいなくなつたり、正確な医学の設備や試薬がなくなつたら、単に実行不可能になつてしまふのは明白である。

会議において、ベラルーシ保健省の上級官僚であるケニツクが、最も規制の厳しい地区にあるゴメリ地方のい

くつかの大きな居住地、特に、ブラーギン、ヴェプリンやホイニキのような町の住民のための一般的医学検査を行うべきだと要求したことを覚えている。私は、そのプロジェクトは非現実的だと彼に話した。というのは、共和国の限られた医療スタッフがこれらの町（人口一〇万以上）に集中すると、放射線汚染状況に関しては重要でない他の地区の混乱と二次的な被害をもたらすからである。放射線関連患者に脅かされており、一般的な健康チェックを要求していて、彼らが考えることができるすべてによって政府を非難しているような、他の町へのしわ寄せが来てしまうからである。

これらの調査にしてもいつものように、我々の報告は、役に立たなかったようだ。この点については、国際的専門家の意見に注目する価値がある。これは、彼らがIACレポートの中で推奨していることである。

「被害を受けた共和国全ての住民の長期的な調査や評価を行うことは、多くの困難や、これにかかる莫大な費用から考えて実現不可能なようであるが、集中して個々のグループの被災住民の検査を行うことが必要である。」

これは、忠告でなく原則である。しかし、この時点でも誰も医科学者の意見に耳を貸そうとはしなかった。

住民の健康についての客観的な結論が、コントロール地区（あるいは少なくともわずかに汚染した地区）との平行した調査なしでは得られないことは明らかであった。このことが、IACのセクションのレポートでの「勧告」で明白に述べられている。

「臨床科学的な疫学調査では特別な注意が必要である。特に対応するサンプルグループ、基準やコントロールの選定に対して配慮が必要である。地方の科学者によって使われるデータのサンプリングと登録の統計学的手法やシステムは、国際的レベルで承認された基準と方法を導入することによって改善されなければならない。」

基本的に重要問題を結論付けるために、私はあと二つの事実を引用する。ウクライナのSCRCに位置するボレスコエの町（人口一万一千人）において、好ましくない社会心理学的状況が作られた。異なる医療チームがここに短期間やって来て、住民（特に子供達）の疾病率についての矛盾する情報を流したのである。チュルノブ

イリへ定期的出張に出かけた際、私は組織形成上非常に重要なこの問題についてウクライナの新しい保健大臣（スピジェンコ）に、次のように援助を申し出た。ウクライナの診療所や地方の医者、あるいはモスクワからの一つの専門家グループを形成し、統一した合同科学的プログラムをつくり、それによって参加する全ての人々を結び付けなくてはならない。彼は同意した。翌日スピジェンコは、主要専門家との会談を開き、提案されたプログラムは承認された。私は、彼等がどの場所をコントロール地区として選択しようとしているのかを尋ねた。彼らはいくつかの場所に名を挙げたが、短い論議の後、満場一致でヤゴティンという町にすることに決定された。それから私は、ポレツスコエ地区住民の健康調査において、コントロール比較がなされなかったことに気づいた。ついに決定が行われ、大臣は、プログラムの実行について個人的責任をもつことを我々に保証した。モスクワへ戻り、我々はウクライナでの定期的調査を行う際の指導を行う専門家を決定し、出発する準備をした。しかし、残念ながらその旅は実現しなかった。後に、電話での会

話で、スピジェンコは、彼の部下の怠慢について述べた。彼らはいくつかの新しいプロジェクト等々に言及した。プログラムは、未だに実行されていない。

もう一つの例。ベラルーシのモギリョフ州の（最管理地区）のクラスノ波尔エ地区で、子供たちの甲状腺機能についての調査が実施されていた。一九八九年以後、甲状腺腫瘍や内部構造を検査する最新の超音波検査法が、このかなり複雑な仕事に導入されていた。一方同じモギリョフ州において、比較的に汚染の少ないコティンスク地区が、コントロール地区として選ばれていた。一九九二年初頭、私はベラルーシで、定期検査を行っている二人の研究者に、コントロール地区での子供の甲状腺機能の調査がどのように行われているかを見てきてほしいと頼んだ。戻るとすぐ、彼らはその地区には内分泌学者がいなかったと私に話した。地方の医者は、超音波エコーを持たないので、触診によって甲状腺を調べていたということだった。調査方法が異なっているのに、客観的な比較ができるというのだろうか？

しかし、甲状腺の放射線関連疾患の問題は、チェルノ

ブイリ事故の医学的影響を扱う計画におけるメインの一つである。これが、長期間に渡る適切で組織化された調査と、観察を要求する長期的問題であるということを心に命じておかなければならない。我々が、この問題について著書に一つに書いたように（医学放射学 №12、一九九一年）、チェルノブイリの事故による子供と大人の甲状腺被曝レベルは、この器官が実際に悪性腫瘍を発生しうるということを証明している。この状況は、そのような偏りを確認し、大規模な観察を必要とした。第一に、調査の代表的な方法と診断的検査と臨床所見によって得られたデータの客観的な検証に注意が向けられなくてはならない。科学者によって、ウクライナとベラルーシで行われた子供における甲状腺の機能の集団検診の結果についての、分析された多くのレポートを基に、国際的専門家は以下の結論に達した。ウクライナとベラルーシの科学者によって供給されたデータは矛盾していて、混乱するものである。彼らは、一般的脳下垂体甲状腺生理学と病理学の常識から非常に逸脱していた。ほとんどの状況において、血清TSHレベルと甲状腺ホルモンレベルは

反比例の関係にある。独自の医学チームに提示されたデータでは、そのレベルは比例関係にあったり、相関していなかったり、反比例していたりしていた。甲状腺機能低下症の頻度は、ベラルーシでは有意に増加していたが、ウクライナでは増加していなかった。これもまたおかしいことである。なぜなら、放射性ヨウ素はむしろ不安定で、風の方向がウクライナへ向かっていたときに原子炉から出ていたはずであった。この結論は、決してウクライナやベラルーシの研究者の様々なチームによって行われた役割が間違っていたということを証明するものではない。専門家の狙いは別にあった。彼らはもう一度検査を精密な機器と試薬を用いて行いたかったのである（我々科学者も、全く持っていなかったか、少量しか持っていなかった）。

一九九〇年、チェルノブイリ国際プロジェクトの専門家は、汚染地区とコントロール地区の甲状腺機能の状態に違いはないとした。しかし彼らは、繰り返し高レベルの被曝をした一部住民の甲状腺については、この技術レベルでは誤差を産む可能性があることを繰り返し強調

していた。

チェルノブイリ事故による汚染地区に住んでいる人々の被曝による後障害の可能性について、専門家は以下の結論に達した。

「プロジェクトチームによって推量された線量と、現在認められている放射線のリスク評価を基に、将来、全てのガンや遺伝的影響の増加が自然発生率を上回るかどうかは、大規模で詳細に検討され、設定された疫学的研究においても識別するのは難しい。子供達の甲状腺の被曝線量の推定の報告の結果は、統計学的に検出可能な甲状腺腫瘍の発生率の増加が将来あるかもしれないというものである。」

専門家達は、将来に対する多くの重要な勧告を行った。特に彼らは、「住居の移転を行う前に、移住によって住民に悪影響を及ぼすかも知れないということも考慮されなければならない」と指摘した。特別な注意が、事故による心理学影響を減少させようとしているプログラムの組織化に向けられた。彼らは、人体に及ぼす被曝の影響について、住民と地方の医師のための教育プログラムを

作成する必要性を強調した。そして彼らは、医学的診断と検査機器、材料や試薬の品質を改善するために全力で取り組むべきだと勧告した。最後に彼らは、再び「地方科学者による統計学的データ収集と登録システムが、国際的に認められた基準と方法に基づいて行われなければならない。」と勧告した。

すでに述べたように、世界中の国の色々な国から来た科学者によって行われたチェルノブイリ国際プロジェクトの結果と結論は、我々の国でいろいろな反応をまき起こした。例えば、ベラルーシとウクライナの科学者の中には、国際的専門家の結論はあまりに楽天的で偏っていると、まともな考察もなしに記述した者もいた。技術的報告書を準備している間、専門家がこれらの人々に何度も会い、彼らにデータの提示を求め、共和国や彼らに対する潜在的な反対者から提供されたあらゆる情報についても、すすんで議論をしたことは覚えておく必要がある。レポートを検討し、承認したウィーン会議（一九九一年五月）の二週間前、特別科学者グループが、レポートの全てのセクションの内容を詳細に分析した。プロジェクト

トの科学班リーダーの案に沿って、三つの共和国の代表者もこれらのグループの仕事に参加した。

これらのグループ会議は、我々の信用ならない仲間達が、報告書に対する自分たちの意見を述べた報告書という形での、三つの旧ソビエト内の共和国から得られた公式データを含み、得られたデータ全部を公開する場であった。私はたまたまその会議に参加したが、ハプニングは何もなかった。会議に招かれた専門家や個々の科学者、国際組織の代表者達は、会議の席上、ウクライナとベラルーシの代表派遣団のリーダーが、その考えの根拠になるような特定の実事や、分析データの提示もなく、プロジェクトの結論に反対したとき、どんなに驚いただろう。例えば、すでに述べたように、主な議論における彼らの意見のポイントの一つは、汚染除去労働者と三〇キロメートルゾーンの住民が、プロジェクトでは検査されなかったということであった。ウクライナとベラルーシの科学アカデミー副総裁のバリアフタルとステパネンコは、彼らも参加した詳細な議論を経たプロジェクトが、チェルノブイリ核発電所の事故の結果放射能汚染に

よる被害を受けた地区の住民の安全のために、ソビエト最高議会から国際的な専門家に依頼されたアセスメントに従って実行され、これらの地区で健康調査が行われたのであり、彼らが言うような調査は行われていなかったことは十分に知っていた。さらにバリアフタルとステパネンコはプロジェクトの国際諮問委員会の公式メンバーであって、ウィーンでの全てのセッションが実際に行われている間、彼らはこれに結び付くようなことや、最終会議の参加者が記憶しているような事実を決して言わなかった。

要するに、これらの代表派遣団によってとられた態度は全て、ウィーンの会議の前に、ウクライナとベラルーシの科学的、社会政治学的なグループによってつくられたものだということがわかった。

彼らの申し立ては、議長であるグロジンスキー氏によって署名された、「チェルノブイリ国際プロジェクトの誤った結論について」という、住民の放射線防護に関するウクライナソビエト最高議会国会委員会（NCRPU）による決定というおおざっぱな形をとっ

ていた。この決定は、プロジェクトの作業が完了してから一八カ月後（一九九二年十月十六日）に決議され、社会の要求に応えたということは疑う余地がない。例えばこの決定において、「IACの結論の不正確さは、特に何十万人という汚染除去労働者や異常地区からの避難住民の検診拒否によって、事故によって被害を受けた地区についての状況を完全に調査できなかったことに由来している」としている。この文書の著者は、編集において、路上集会で培った自分の癖までは編集することができなかったように、以下のように書いている。

「我々は、チェルノブイリ国際プロジェクトが実行されているとき、IACは明らかに安全よりも原子力の信頼を保つことに全力を尽くしていたと述べなければならぬ。これは、事故の医学生物学的影響を反映した客観的データに対する不完全な研究や偏った傾向をもつ一般的結論によるものであった。」

私は、NCRPUによって編集されたこの非常に偏った文書の科学的な面を分析するつもりはないが、共和国のある研究所から受け取ったデータのかなりの部分が、

専門家によって誤りであるとされたということを強調しておきたい。

例えばあまりないことだが、専門家が一般化された情報を調べる際、結論を作製するための基礎データを仲間から手に入れることができない場合、彼らを客観的なデータが不完全な研究であるという理由で非難するのは、少々の外れといえる。しかし、放射線防護についてのウクライナ国家委員会の主な結論は実際驚くべきものであって、国際委員会の指導的放射線学者に対する起訴状を読んでいるかのようにであった。

「チェルノブイリ国際プロジェクトは、今後の重要性について何の提起も行わなかった。このことは世界の世論を誤らせ、住民の健康に対するチェルノブイリ事故の危険な影響に関する彼らの警戒感を薄めることになった。」

二〇〇人の国際的専門家に対する彼らの非難、騙して警戒をゆるめさせたことに対する非難、我々の国で科学者に対する迫害を助長した、余りにもよく知られる共産党中央委員会の政治的解決策のイデオロギー的お決まり

のパターンが、良心よりも優先していたのである。

プロジェクトが予測的重要性を持たなかったという主張に関して、著者の希望的観測ではあるが、上で論議されたような事実と議論によって納得できると思われる。

つまり私ははっきりと、チェルノブイリ国際プロジェクトとそれに参加した人々は、いかなる弁解も必要ではないと述べたいのである。このユニークなプロジェクトの知見、結論と勧告は、チェルノブイリ事故の影響の評価の客観的評価と、調査の質に正当性を与えたのは明らかである。重松教授が、プロジェクトの紹介の中で書いたように、時だけが、我々の貢献の大きさを示してくれたのである。